

派生名詞句とその項*

佐藤 亮 輔

1. はじめに

これまで、派生名詞句は内項 (of句) の有無によって、2つに分類されてきた¹⁾。本稿では便宜上、内項を持つものを Type A、内項を持たないものを Type B と呼ぶ。

- (1) a. the destruction of the base (confused the U.S. army.) Type A
 b. the destruction (confused the U.S. army.) Type B

2つの派生名詞句には次のような違いが観察されている。第1に、Type A の場合にのみ、相を修飾する形容詞や前置詞句が生起可能である。(2)・(3) に示されるように、当該の名詞句が内項 (of句) を持つ場合にのみ、*frequent* や *constant* といった形容詞が生起できる。同様に、(4) のように、相を修飾する前置詞句も当該の内項を伴う名詞句とのみ共起できる²⁾。

- (2) a. The frequent expression of one's feelings is desirable.
 b. *The frequent expression is desirable. (Grimshaw 1990: 50)

* 本稿の執筆に際し、内容・書式など、多岐にわたりご指導くださった金子義明先生、鳥越郎先生に深く感謝申し上げます。また、日々の研究の中で有益な示唆を下された当時助教の佐藤元樹先生と院生の方々、貴重な助言を下された匿名の査読委員の先生方、そしてインフォーマントとしてご協力くださった Max Phillips Jr. 先生、James Tink 先生に記して謝意を表します。本稿における不備の責任の一切は、筆者にあります。

- (3) a. The constant assignment of unsolvable problems is to be avoided.
b. *The constant assignment is to be avoided. (ibid.)
- (4) a. Their performance of the play in only two hours (surprised the critics.)
b. *The performance in an hour surprised the critics.
(Harley 2009: 338-339)

第2に、Type Aの場合は常に単数・不可算となる。(5)では、aという数詞と内項が共起できないことが示されている。例えば、(5a)では、rape of a womanあるいはa rapeという表現は可能だが、a rape of a womanという表現は非文となる。

- (5) a. a rape (??of a woman)
b. a collapse (??of a table)
c. a repair (??of a motorcycle) (ibid.: 342)

最後に、Type Aの場合は意味が常に合成的であるのに対して、Type Bの場合は非合成的となる場合がある。(6a)においてgovernmentは「統治」を意味し、基の動詞governの「統治する」という意味を引き継ぎ、合成的となっている。一方、(6b)の場合は「政府」を表し、基の動詞の意味を引き継いでおらず、非合成的な意味となっている。

- (6) a. government of the people
b. the U.S. government

ここまでの事実をまとめると、次のようになる。

- | (7) Type A | Type B |
|-------------------|-----------------|
| a. 内項を持つ | 内項を持たない |
| b. 相を修飾する語句が生起できる | 相を修飾する語句が生起できない |
| c. 常に単数・不可算 | 単数または複数 |
| d. 意味は常に合成的 | 意味は時に非合成的 |

多くの先行研究ではこの2種類の名詞句に別々の構造が仮定されてきた。しかし、この2種類の名詞句が異なった構造を持つのであれば、なぜ発音や形態的具現の仕方、(多くの場合)意味が同じであるにもかかわらず異なる構造を持つのかという疑問が生じる。先行研究ではこの理由が説明されていない。そこで、本稿ではこの2つのタイプの派生名詞句は共通の構造を持つが、両者の相違点は独立した理由により説明されると主張する。

2. DM, DP 仮説、UTAH

本稿では、分散形態論 (Distributed Morphology: DM, Halle and Marantz (1993)) の枠組みを採用する。この枠組みでは、語は語彙部門ではなく統語部門で形成された後、語彙挿入を受け具現化される。

また、本稿は Abney (1987) の DP 仮説を採用する。この仮説に基づくと、名詞句は最上位の範疇として次のような決定詞句 (DP) を持つ。

- (8) [DP Possessive [D' [D { 's / the }]...]]
[+AGR]

Abney によると、D 主要部には所有格要素 's または決定詞が現れる³。また、所有格要素には [+AGR] があり、これは指定部の要素によって照合される。

最後に、本稿は Baker (1997) に従い、(9) の画一的主題役割付与仮説 (The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis: UTAH, Baker (1988)) により、主題関係付与の構造的画一性は基底構造で表示されると仮定する。

(9) The Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-structure.

(Baker 1988: 46)

Baker によると、他動詞、非能格動詞、非対格動詞はそれぞれ (10a-c) の構造を持つ。(10a) では John と the bread の意味役割はそれぞれ行為者と主

題となる。(10b, c) では、Johnの意味役割はそれぞれ行為者、主題となる。

(10) a. John cut the bread.

[v1 [D John][v1 [v1 CAUSE [v2 [DP the bread [v2 CUT]]]]]]

b. John laughed.

[v1 [D John][v1 [v1 CAUSE][v2 LAUGH]]]

c. John fell.

[v2 [D John][v2 FALL]]

以上の枠組みに基づき、次節では2つの派生名詞句はタイプにかかわらず同一の構造を持つと主張する。

3. 主張

本稿では、派生名詞句はタイプにかかわらず次の同一の構造を持つと主張する。

(11) [DP _ [[D [NP n [vP [_ Internal Argument] [[V Root]]]]]]]

Bakerに従うと、最も下位にある動詞句の指定部には意味役割・主題が与えられるため、(11)の構造におけるvP指定部(にある内項)に付与される意味役割は主題となる。この内項に格付与を行う手段は2つあり、1つは前置詞ofを挿入する方法であり、もう1つは内項をDP指定部へ移動させる方法である。また、内項は常に存在し非顕在的な場合もあると仮定する⁴。最後に、外項は統語構造に導入されないと仮定する⁵。

名詞句内部の動詞の存在は、形態的具現と形容詞の解釈から支持される。次の*The Corpus of Contemporary American English* (Davies (2012))からの文において、下線部の名詞はいずれも顕在的な内項を伴っていないため、Type Bに属する。しかし、動詞にのみ結合する接頭辞re-や動詞形態素-iz(e)-から動詞の存在が確認される⁶。

- (12) a. ... so it's not something that, you know, most hostage things are
reactionary.
b. While it is a requirement for *naturalization*, it is not—and never has
been—a requirement for citizenship. (CCAЕ)

また、次の (13) の名詞句における形容詞 *severe* には (14a, b) に示す2つの解釈がある。

- (13) *severe punishment*
(14) a. *punish severely following rules*
b. *the content of the punishment is severe*

(14a) の解釈では、*severe* は懲罰行為の様態を示しており、懲罰行為を表す動詞の存在が示唆される (-er 名詞についての同様の議論が Alexiadou and Schäfer (2010) に見られる)。以上から、派生名詞句内部の動詞の存在は独立した根拠を持つ。

次節では、本節で提案された構造に基づき、先行研究で観察されてきた現象に説明を与える。

4. 分析

4.1. 2つの派生名詞句の違い

(11) の構造に基づく、(7) に示す2つの派生名詞句の違いは次のように説明される。

まず、Type A の名詞句のみに相を修飾する語句が生起するという (7b) の現象は、顕在的な内項の有無から説明される。Tenny (1992: 4) によると、顕在的な内項によって特定の期間が決まり、当該の表現に境界が与えられる。このことは、例えば (15a) が (15b) に言い換え可能であることを示されている。

- (15) a. *perform a play halfway*
b. *perform half a play* (Tenny 1992: 5)

同じメカニズムによって、Type Aの場合は内項の存在によって有界的 (bounded) 出来事を表すこととなるが、Type Bの場合は結果状態などを表すこととなる。そのため、(2)-(4) のように Type A の名詞句にのみ相を修飾する語句が生起できる。

また、Type A の名詞句は常に単数・不可算であるという (7c) の観察は、そもそも経験的に妥当でなく、複数・可算の Type A の名詞句が指摘されている。

- (16) a. There were three arrivals of a train.
b. There was a capsizing of a boat by Mary. (Alexiadou 2009: 278)

最後に、Type A の名詞句は常に合成的な意味を持ち、Type B の名詞句は非合成的な意味を持ちうるという (7d) の違いは、他動詞と内項の関係から説明される。Mittwoch (2005) によると、他動詞が顕在的な内項を欠く場合、習慣や職業を表すことができる⁷。

- (17) Q. What does he do for a living?
A. He weaves/prints. (Mittwoch 2005: 244)

筆者が調べた限りでは、このことは限られた動詞にのみ当てはまるわけではない。例えば、(18) に示されるように、他動詞 *destroy* や *govern* を用いた場合であっても、習慣や職業として解釈される場合には文法文となる。筆者のインフォーマントによると、(18a) は John が手に入れたものを壊してしまうという習慣を表し、(18b) は John が統治を行う何らかの権限を持つ地位にあることを表す。

- (18) a. John destroys.
b. John governs.

同じ理由で、Type A の名詞句は内項を持つため合成的な意味を表し、Type B の名詞句は内項を欠くため非合成的な意味を表すことができる。このことから、(6a, b) の意味の違いが説明される (下記、(19a, b) として再録)。

- (19) a. government of the people
 b. the U.S. government

(19a) では「人々を統治すること」という合成的な意味が表され、(19b) では政府（広義の職業）といういくぶん非合成的な意味が表される。

以上、本節では、先行研究で観察されてきた現象はすべて独立した理由で説明できることを示した。次節ではこの分析に基づき、構文ごとの名詞化の可否について論じる。

4.2. 構文ごとの名詞化の可否

本稿の主張に基づくと、従来の研究ではあまり取り上げられることのなかった現象についても説明を与えることができる。

これまで (11) の構造に基づき、派生名詞句は外項を欠き、内項のみをとる構造を持つと主張してきた。この主張によると、同じく内項のみを持ち、外項を欠く (20)・(21) のような中間構文は容易に名詞化可能であると予測される。

- (20) This wood splits easily. (Fagan 1992: 65)
 (21) This glass breaks easily. (Pinker 1989: 106)

実際、これらを名詞化した次の (22)・(23) は文法文である。(22) では *easily* という副詞の代わりに *easy* という形容詞が用いられていることから、動名詞ではなく派生名詞句として解釈されていることが明らかである。

- (22) this wood's easy splitting (helped the woodcutter.)
 (23) this glass's easy break (is dangerous for children.)

よって、本稿の主張に基づくと、中間構文が名詞化できるという事実も正しく捉えることができる。

次に本稿の主張に基づくと、派生名詞句は内項のみを持ち外項を欠くため、非対格動詞と非能格動詞で名詞化の可否に差異が生じると予測される。一般に、非対格動詞は内項のみを、非能格動詞は外項のみを持つ。したがっ

て、(11)の構造に基づくと非能格動詞は名詞化できず、非対格動詞のみが名詞化可能であると予測される。実際、この予測どおり、(24)・(25)のような非対格動詞の場合は名詞化可能であるが、(26)・(27)のような非能格動詞の場合は名詞化できない⁸。

- (24) a. God exists.
b. the existence of God
- (25) a. The fish smells.
b. the smell of the fish
- (26) a. John worked.
b. *the work of John
- (27) a. John played.
b. *the play of John

よって、本稿の主張の下では、非能格動詞の場合は名詞化できず、非対格動詞の場合にのみ名詞化可能であるという事実も正しく捉えられる。

最後に、(11)の構造に基づくと派生名詞句は項を1つのみとるため、(28a)のような内項を2つとる受益者二重目的語構文は名詞化できないと予測される。一方、(28b)のような前置詞受益者構文の前置詞句 (for 句) が付加部であると考え、動詞が選択する (内) 項は1つとなるため、前置詞構文の場合は名詞化可能であると予測される。

- (28) a. John bought Bill the toy.
b. John bought the toy for Bill.

実際、受益者二重目的語構文 (28a) を名詞化した (29a) は非文法的であるが、前置詞受益者構文 (28b) を名詞化した (29b) は文法的である。

- (29) a. *John's buying of Bill (of) the toy
b. John's buying (of) the toy for Bill

以上、本稿の主張に基づくと、これまであまり取り上げられることのな

かった、中間構文の名詞化、非能格動詞と非対格動詞の名詞化の可否、受益者構文の名詞化にも原理的な説明を与えられることを見た。次節では、派生名詞句の所有格要素について検討する。

5. 派生名詞句の所有格要素

(11)の構造に基づくと、派生名詞句はそのタイプにかかわらず外項を持たない。その結果、派生名詞句の所有格要素は常に非項となる。一見したところ、派生名詞句の所有格要素が動詞句の外項に対応するよう見える場合がある。例えば、(30a)の動詞句は(30b)のように名詞化することが可能である。このとき、(30b)のthe enemyには行為者の解釈がある。

- (30) a. The enemy destroyed the city.
 b. the enemy's destruction of the city

しかし、行為者としての解釈が可能であることは、必ずしもこれが項であることの証拠にはならない。一般に、所有格要素は行為者としての解釈を得られやすく、非派生名詞句においても、所有格要素は行為者としての解釈を得られることがある。次の(31a)においてlatest albumは非派生名詞句であるが、その所有格要素のKyary Pamy Pamyは行為者として解釈される。同様に(31b)において*Ophelia*はイギリスの画家Millaisの絵画のタイトルであるが、所有格要素Millaisは行為者として解釈される。

- (31) a. Kyary Pamy Pamy's latest album
 b. Millais's *Ophelia*

したがって、所有格要素は非派生名詞句においてさえも行為者の解釈を得られるため、解釈のみからこれが項であると結論づけることはできず、本稿のようにDP指定部に位置する非項であると分析することの反証とはならない。

同様の議論は、by句についても成り立つ。(32b, c)のような派生名詞句において、by句はしばしば(32a)のような動詞句の受動態のby句と同列に

扱われ、項であると主張されてきた。

- (32) a. The city was destroyed by the enemy.
b. the city's destruction by the enemy
c. the destruction of the city by the enemy

しかしby句も実際には非派生名詞句と共起可能である。(33) で用いられている名詞句は(31)の場合と同様、ともに非派生名詞句である。しかし、by句が共起しており、このby句は行為者として解釈される。

- (33) a. the latest album by Kyary Pamy Pamy
b. the *Ophelia* by Millais

したがって、by句の場合も所有格要素の場合と同様、その解釈によって項であると結論づけることはできず、非項であると考えerことは妥当である。

以上、本節では派生名詞句と非派生名詞句の所有格要素を比較し、外項(行為者)として振る舞っているように見えたのは、所有格表現の解釈ストラテジーによるものであり、反例とはならないことを示した。

6. 結論

本稿では、派生名詞句はタイプにかかわらず同一の構造を持ち、内項のみをとると主張した。本稿の分析は、これまで指摘されてきた2つのタイプの派生名詞句の違いに独立した説明を与えるものである。

注

1. ここで言う派生名詞句とは、Borer (2013a) の ATK (-ation and the akin) 名詞句のことである。-er名詞などのその他の派生名詞句については議論しない。
2. Harleyは(4)の容認度を#で表しているが、本稿では表記を統一するため、*を用いて改変している。
3. 厳密には、Abneyは'sが所有格要素の一部となっている可能性も示唆している。しかし、本稿の分析とは直接関係がないため、以降この問題には立ち入らない。

4. このことを仮定する理由については、注7を参照。
5. 外項が統語構造に導入されない理由としてはnの選択制限などが考えられるが、本稿では紙面の都合上、詳細には立ち入らない。
6. (12)における下線および斜体は筆者による。Borer (2013b) も同じ語を用いて形態的具現を手がかりとしている。
7. この点について、Mittwoch自身、非顕在的な内項の存在を仮定すべきか、そもそも項が存在しないと仮定すべきか結論を下していない。従って、本稿では暫定的に非顕在的な内項を仮定するが、どちらが経験的に妥当かの判断については、将来の研究課題とする。
8. 一見すると、John's workやJohn's playなどの例が反例に思われるかもしれない。しかし、所有格要素は外項ではなく非項であるため、本稿の分析にとって問題とはならない。

参照文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Alexiadou, Artemis (2009) "On the Role of Syntactic Locality in Morphological Processes: The Case of (Greek) Derived Nominals." In Anastasia Giannakidou and Monika Rathert (eds.) *Quantification, Definiteness, and Nominalization*, 253-280. New York: Oxford University Press.
- Alexiadou, Artemis and Florian Schäfer (2010) "On the Syntax of Episodic vs. Dispositional -er Nominals." In Artemis Alexiadou and Monika Rathert (eds.) *The Syntax of Nominalizations across Languages and Frameworks*, 9-38. Berlin: Walter de Gruyter.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark (1997) "Thematic Roles and Syntactic Structure." In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 73-137. Netherlands: Kluwer.
- Borer, Hagit (2013a) *Taking Form*. Oxford: Oxford University Press.
- Borer, Hagit (2013b) "The Syntactic Domain of Content." In Misha Becker, John Grinstead, and Jason Rothman (eds.) *Generative Linguistics and Acquisition*, 205-248. Amsterdam: John Benjamins.
- Davies, Mark (2012) *The Corpus of Contemporary American English*. Provo, UT.: Brigham Young University.
- Fagan, Sarah (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Construction*. Cambridge, MA.: Cambridge University Press.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA.: MIT Press.

- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection.” In Kenneth Hale and Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 111-176. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Harley, Heidi (2009) “The Morphology of Nominalizations and the Syntax of vP.” In Anastasia Giannakidou and Monika Rathert (eds.) *Quantification, Definiteness, and Nominalization*, 321-343. New York: Oxford University Press.
- Mittwoch, Anita (2005) “Unspecified Arguments in Episodic and Habitual Sentences.” In Nomi Erteschik-Shir and Rapoport Tova (eds.) *The Syntax of Aspect*, 237-254. New York: Oxford University Press.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Tenny, Carol (1992) “The Aspectual Interface Hypothesis.” In Ivan Sag and Anna Szabolcsi (eds.) *Lexical Matters*, 1-27. Stanford, CA.: CSLI.

(東北大学大学院生)

r@sato.name